

セカンド・マジョリティ・グループとしての高齢者の社会観 Social Attitudes of Elderly Japanese as the Second Majority Group

小田 利勝
Toshikatsu ODA

神戸市在住の65歳以上の男女を対象として実施した大規模標本調査の結果に基づいて、日本人口の年齢構造におけるセカンド・マジョリティ・グループとしての高齢者の社会観と、その構造を明らかにすることを試みた。高齢者の多くは保守的ではない、というこれまでの多くの研究が裏打ちされるとともに、高齢者には政治的、社会的無関心層は少なく、社会問題に対するに厳しい認識と政治家や専門的知識人、役人に対する不信感をもっている高齢者が多いこと、しかし、また、私たちが少々がんばったところで政治はよくなると多くの高齢者は考えており、高望みせずに、気ままに生きることが幸せと考えている高齢者が多いことが明らかにされた。主成分分析を行った後に、その結果を参考に共分散構造分析による検証的因子分析を試み、高齢者の社会観の構造を明らかにした。

キーワード：高齢者、社会観、保守主義、共分散構造分析、神戸市

Keywords : theelderly, socialattitudes, conservatism, structural equationmodelling, Kobe

はじめに

予想を上回るスピードで進行する人口高齢化は、高齢者を支援や扶養あるいは介護の対象としてだけではなく、あるいは、そうした対象から、政治、経済、文化、社会のすべての領域において、かつてとは比較にならないほどの影響力を及ぼす可能性を秘めた存在として浮かび上がらせることになる。

国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口(平成9年1月推計)に従えば、老年人口(65歳以上人口)は、高齢化が今後さらに進んだとしても、50年先の2050年においてさえ、年齢3区分別(0-14歳、15-64

歳、65歳以上)人口構造におけるマジョリティ・グループになることはない。しかし、すでに1997年に老年人口は年少人口(0-14歳)を絶対的にも相対的にも上回ってマイノリティ・グループからセカンド・マジョリティ・グループになった。そして、今後はさらにその割合を増大させていくと予測されている。その結果、老年従属人口指数(15-64歳人口に対する比率)も、1999年の24.4%から2025年には46.0%に増大し、2050年には59.1%になると推計されている。

老年従属人口指数は、一般に、非生産年齢人口である老年人口を支える(扶養する)15-64歳の生産年齢人口の負担の度合いを指し示す数値とされてきた。しかし、過去も、そして将来もずっとマジョリティ・グ

神戸大学発達科学部人間科学研究センター
Research Center for Human Sciences, Faculty
of Human Development, Kobe University.
oda@kobe-u.ac.jp

グループであり続ける 15-64 歳人口とセカンド・マジョリティ・グループになった老年人口との絶対的および相対的規模の差は、逆転することはないにしても、確実に縮小していく。

このことは、老年人口が、マジョリティである 15-64 歳人口に従属する、あるいは扶養される人口としてマジョリティの負担をますます増大させるということだけではなく、意志決定におけるマジョリティのパートナーとしての地位 - 役割を獲得することになる、あるいは、マジョリティは、セカンド・マジョリティとしての老年人口をパートナーとせざるをえなくなることをも意味する。

政治の領域に関連して、有権者の中に占める老年人口の割合を考えてみよう。前述の将来推計人口を用いて 20 歳以上人口の中で 65 歳以上人口が占める割合を算出すると、1999 年では 21.1%であったが、2025 年には 33.4%となり、2050 年には 39.3%にまで増大する(ちなみに、1930 年では、その割合は 8.9%にすぎなかった)。選挙権が与えられる年齢が将来も現行の 20 歳以上であるとすれば、高齢者の投票行動や選挙活動が政治に与える影響は、高齢化の進行とともにますます大きくなる、あるいは無視し得なくなるということである。

従属人口として一括されてきた老年人口は、高齢化が進行する以前は、いわばサイレント・マイノリティであった。しかし、高齢化の進行とともにセカンド・マジョリティとして社会のあらゆる領域における意志決定過程に強い影響力を発揮することが可能な規模に「成長した」ということである。

よく知られているように、アメリカなどでは、すでに各種の高齢者団体が政治や経済、宗教などさまざまな領域で活発な活動を展開しており、強力な圧力団体として政

策決定に影響を及ぼしている。日本においては、まだそうした動きは顕著ではないが、セカンド・マジョリティとなった老年人口が、今後、サイレント・セカンド・マジョリティでいるのか、それともノイジー・セカンド・マジョリティとして影響力を発揮するようになるかが、高齢者の生活や生き方、ひいては高齢社会日本の将来を少なからず左右することになるといっても過言ではないであろう。

老年人口がそのいずれの方向に向かうかは、今日の高齢者が、日本社会やそこでの生活、生き方についてどのように考えているかにかかっているといつてもよいであろう。本稿で高齢者の社会観について考察しようとするのは、そのためである。社会観という用語は幾分曖昧な使われ方をするが、本稿では、それを社会および社会生活に対する見方や考え方、意見、態度、評価、価値観等を包括する用語として用いることにする。

高齢者のそうした社会観に関連する関心は比較的早くからあり、高齢者の態度に関する研究や高齢化問題の政治経済学的研究などさまざまな領域、側面から研究されてきた(Rose, 1965 ; Fengler and Wood, 1972 ; N. E. Cutler, 1977)。それら研究に共通する主要な関心は、一貫してリベラル - 保守の次元で高齢者の社会的態度を分析することに向けられてきた(S.J. Culter, 1987)。そして、高齢者は若い世代の人間よりも保守的であり、人は年齢が上がるにつれて保守的傾向になるという一般的な見解が事実と反することや社会的、政治的な価値観に関する世代間の相違とみられていたものが、その人が置かれている、あるいはその中で過ごしてきた文化や時代といった社会的(環境)条件の違いの反映であることを明らかにしてきた(Binstock and Day, 1996)。

今日では、高齢者だからといって何ごと

にも保守的あるいは権威主義的であるとか伝統や慣習を重んじるといった素朴な高齢者観は退潮していると思われるが、そうしたことも含めて、本稿では、神戸市の 65 歳以上の男女を対象とする郵送調査から得られた結果の一部を用いて、最近の日本における高齢者の社会観の一端と、その構造を明らかにしたい。

1. 研究の枠組みと方法

(1) 現在の老年人口の性格

老年人口という年齢集団それ自体は、65 歳以上(2001 年現在で 1936<昭和 11>年以前の生まれ)という広い年齢の幅をもった単なる統計的集団にすぎない。しかし、そこに所属する個人は、同時期に出生し、同時代を生きてきたという意味で共通の歴史的体験をもつ。

日本では、年号によって時代やコーホート(同時出生集団)を区分することがある。年号が必ずしもその時代とその時代に生きた人々の生活を特徴づけているというわけではないが、便宜的に年号によってコーホートを区分すれば、現在(2001<平成 13>年)の日本の老年人口を構成するコーホートの分布は、明治生まれが 3%、大正生まれが 37%、昭和生まれが 60%である。

「明治は遠くになりけり」と言われたのは明治維新以後百年を経た 1968 年のことである。それから既に 30 数年が過ぎ、明治生まれの人々は老年人口の 3%、全人口の 0.7%を占めるにすぎなくなった。「明治は遙か遠くになりけり」であり、今日の老年人口の大半は昭和生まれで占められるようになった。年齢でいえば、65 歳から 75 歳までの人々である。

昭和年代は激しい変化の時代であったが、昭和元年生まれの人たちは、まさにその激動の時代を生き抜いてきた世代であ

る。不景気の世の中で幼少時を送り、戦時体制の中で十代の青春期を過ごし、敗戦とともに成人を迎えた。そして、制度や価値観が大きく変化し続けた時期に結婚し、子育てに励んだ。

三十代から四十代前半は日本の高度経済成長を支えて働いた。テレビ、冷蔵庫、洗濯機の三種の神器からカラーテレビ、クーラー、カーの 3C へという国民の生活水準の上昇を体験したが、四十代後半には石油ショックによる狂乱物価に悩まされた。

日本が世界の経済大国として自他ともに認めるようになり、豊かさを味わいながらも「おしん」に昔を偲びつつ高齢化社会の到来を耳にしたのが五十代である。そして、六十歳になった時には、年金法の改正や「実年」という名称をもって中高年の呼び名に変える提案がなされるなど、高齢化の進展を否応なく意識させられることになった。

人生八十年代が告げられ、新しい高齢者像の論議の中で、さてこれからの老後生活をどう充実して過ごしていこうかと模索しながら六十代前半を過ごし、昭和の終わりと平成の幕開けを迎えた。そして、バブル経済とその崩壊の過程で六十代後半を過ごし、関東大震災から 72 年を経た 1995 年に発生した阪神大震災のときに古希を祝い、ミレニアムという聞き慣れない言葉と新世紀を祝う声を聞きながら 75 歳を迎えた。

時代の激しい変化に適応しながら生き抜いてきた人たちは、もちろん昭和元年生まれの高齢者だけではない。明治生まれ、大正生まれの高齢者もそうであるが、その時々々に時代の大きな変化に対応した生き方を求められ、それに応えてきた。

今日、本格的な高齢社会を迎えようとしている日本で、セカンド・マジョリティとなった高齢者は、もはや「役割なき役割」の担い手ではなく、かつてないほどに多くのことが求められるようになった(小田,

1999)。そして、同時に、高齢期の新しい生き方があらためて模索されるようになった(小田, 1991; 1998; 2001; 中島・小田, 2001)。そうした中で、青壮年層や高齢者の老年規範がどう変化するも注目されることである(小田, 2000)。高齢者をめぐる以上のような社会的変化の中で、今日の高齢者の社会観にはどのような特徴がみられるであろうか。

(2) 調査項目

一口に社会観といっても、その中身は多様である。その下位カテゴリには、政治観や経済観、家族観や地域社会観、国家観、教育観など多様なものが考えられる。さらに、そこで生活している社会あるいは自らの社会生活に対する見方や考え方は、その人がそのときに置かれている社会的条件や、その人の人生観とも密接に結びついていよう。したがって、高齢者の社会観を明らかにしようとする場合、どのような観点からどのような事柄を取り上げるかが重要な課題となる。

高齢者の社会観に関するこれまでの先行研究は、既に述べたように、リベラル - 保守の次元での分析に主要な関心を向けてきた。そうした次元での分析は、政治や経済、家族等々の領域別に社会観を分析することではなく、それら領域を貫いて、あるいはそれら領域に関わりなく高齢者の社会観を分析することを目的としている。

本稿においても、同様に、下位カテゴリごとに社会観を分析することをせずに、以下に述べるような観点から高齢者の社会観と、その構造を明らかにすることとする。

高齢者の社会観を分析する際に、リベラル - 保守の次元に関心が向けられ、とくに高齢者は保守的であるか否かの検証に力が注がれてきたことは既に述べたが、そこでいう保守的あるいは保守主義というのは、

新しいものや変化を好まず、あるいは嫌悪し、以前のままの状態 = 現状を維持することを目的とし、伝統・歴史・慣習・社会組織を固守しようとする態度である。

そうした態度は、権威に対しては自己卑下や盲信、盲目的服従、弱いものに対しては権威を笠に着て強権的態度や行動をとるといった権威主義と結びつきやすい。そこで本稿では、それら伝統的保守主義・権威主義を分析の一つの次元(軸)として設定することにする。

ところで、その人がもつ社会観は、その社会におけるその人の生き方やその社会に対するその人の適応の仕方の反映でもある。高齢者の適応問題は、サクセスフル・エイジングの主要な課題として社会老年学において数多く取り上げられてきたテーマであるが(小田, 1991; 1993)、ここでは、かつてマートン(Merton, 1957)が設定した5つの適応様式とタンストール(Tunstall, 1965)が高齢者の孤独研究で用いたアノミー度を分析の次元として導入することにする。

周知のように、マートンは、アメリカ社会で一般に支持されている目標(文化的価値) - 出世や金儲けなどの物質的成功 - と、それを達成する手段 - 自己修練や努力、勤勉さ - に対する承認と拒否の組み合わせから、アメリカ社会への適応様式を「同調」、「革新」、「儀礼主義」、「逃避主義」、「反抗」といった5つに類型化した(表1)。

その内容に関しては別稿で詳述したことがあるが(小田, 1993)、以下に簡単に触れておく。

「同調」は、成功につながるか否かにかかわらず一般に支持されている目標と手段をとともに受け入れることである。大多数の人の適応様式である。

「革新」は、制度的規範から離れて目標を達成することを指す。社会的に是認され

ている目標を受け入れるが、その目標を追求するためなら、不当・違法な手段でも使う。大望を遂げることに高い価値を置くアメリカ社会においては、それが逸脱行動であっても目標を遂げれば成功という悪徳を促す。そうした社会では、真価や努力ではなく、運やチャンスが強調される。真価や努力に対して報酬が与えられない状況の下では、抜け目なくて積極的に行動する者が得をすることになるから、そうした革新的実践が普及する。

「儀礼」は、活動に駆り立てた大望を実現不可能なものに見なして放棄あるいは切り下げているが、社会的に容認された基準に同調することである。規則を守ることが大望実現のためではなくて、強迫観念のように自己目的化しており、あきらめと型にはまった活動が特徴である。

儀礼主義者は、たとえ出世の見込みがなく、また報酬がほとんど得られなくても、退屈な仕事に専心するような人である。外的行動は文化的には望ましくなくても制度上は黙認される。社会的地位が当人の業績によって強く左右される社会で多くみられる適応様式である。

大望を抱くと欲求不満や危険が生じ、志望を引き下げれば満足と安全が得られるか

ら、文化的目標をめざす競争に必ずつきまとう危険や欲求不満から逃避しようとするためには、文化的目標を放棄して安全な慣例や制度的規範にますます固執することになる。「幸福(満足)とは、達成を分子とし、志望を分母とする分数で言い表すことができる」(カーライル)からである。

「逃避」は宿命論的消極主義である。正当な手段では常に目標に近づき得ず、また内心の禁止によって不当な手段を採用し得ないから、葛藤を回避するために目標と手段を放棄する。文化的目標に価値を認めず制度的手続きも顧みない。社会からの報酬が得られなくても欲求不満をほとんど持たない社会的無関心(アパシー)の適応様式であり、社会的な孤立を招くことにもなる。

「反抗」は、既存の価値観と規範的手段をとともに拒否し、新しい目標や新しい手段を制度化して、他の社会成員にも共有せしめようとする過渡的な反応である。それは、現存の社会的文化的構造を変革しようとする努力をさし、既存の社会的文化的構造の範囲内で適応しようとするのではない。したがって、それは、価値変革を志向し、欲求不満の原因を社会構造に求める結果、保守主義的神話と対立することになる。

表1. マーтонаの個人的適応様式の類型

適応様式 の類型	文化的 目標	制度的 手段	
同調	+	+	… 社会が安定しているほど、最も一般的で広く普及
革新	+	-	… 制度的規範から離れた革新的実践(要領のよさ)
儀礼主義	-	+	… あきらめと型にはまった活動
逃避主義	-	-	… 宿命論的消極主義
反抗	±	±	… 価値変革、保守主義的神話と対立

注：+は「承認」、-は「拒否」、±は「一般に行われている価値の拒否と新しい価値の代替」

マートンが類型化した5つの適応様式は、当時のアメリカ社会において、社会的に是認されている価値や目標とそれらを達成するための限られた手段との間に生じる緊張や葛藤に対して起こりうる人々の反応(適応様式)に関する理念型あるいは索出的モデルであるが、その時代のアメリカ社会に限定されることなく、広く現代産業社会における人々の社会および社会生活に対する見方や考え方、意見、態度、評価、価値観を探る上で有効なモデルと考えられる。

しかし、そのモデルはあくまでも記述モデルであり、マートン自身はもとより、そうした適応様式を測定する項目あるいは測定尺度を用意していたわけではない。そして、その後の研究者がマートンの適応様式の類型に基づいて測定尺度を開発した例を筆者は寡聞にして知らない。そこで、本稿では、それら5類型およびそれら類型に関連する類型として「アパシー」を加えた6類型に対応させて後に記すような測定項目を作成した。

タンストールのアノミー度は、ストロールが作成したアノミー尺度の援用であるが、それは、アノミーに関する次のような概念規定に基づいている(以下の引用は訳書『老いと孤独』から)。

- ・コミュニティ中でのリーダーは個々の人とは切り離された存在であつて、個人のもっている ニードには無関心であるとする考え方
- ・社会的秩序は本質的に不確定なもので、予想できないものであるとする受けとめ方すなわち秩序否定的な考え方
- ・自分や自分に似た人間が自分たちのすでに到達した人生の目標から後退しつつあるとする将来の人生の目標の放棄の考え方
- ・極端な形では、人生それ自体が無意味であるとする考え方に映し出されるような、社会規範および社会的価値の内在化の放

棄ないしは喪失

- ・社会的存立の基礎である隣りあった直接的な人間関係の枠組みがもはや助けにもならないし、将来をさし示すものではなくなったとする見方

そうした概念規定に対応させて作成された次のような意見項目(翻訳文のママ)が回答者に提示され、同意に1点、非同意に0点を与えて、その合計点でアノミー度が測定されている。

- ・お役所は普通の人にはあまり関心をもたないので、お役所に手続を書いても役に立たない
- ・現代は、ほんとうに自分のために生きるべき時代で、明日は明日の風がふく
- ・誰が何と言おうとも一般の人の生活はだんだん悪くなっていて、よくなってはいない
- ・未来を見通した形で子供を世の中に送り出すといったそんなに好都合には物事は運ばない
- ・この時代、誰かにたいして責任を負って生きていると考えている人はいない

この翻訳文は、そのままでは回答者にわかりにくいと考えられるので、それらを参考にしながら後に述べるような意見項目を作成した。

ところで、高齢者の社会観は、現に生活している高齢期の生活と離れては議論できない。そこで、以上の伝統的権威主義・保守主義、同調、革新、儀礼、逃避、反抗、アパシー、アノミーに関する項目に今日的課題である高齢期の自立生活と扶養をめぐる問題(小田, 1999)と地域生活に関する項目を追加し、以下に示す11分類48項目の社会観測定項目を設定した。

なお、文化的目標とその実現のための制度的手段とをともに承認するという「同調」に関しては、それを現在の社会状況を肯定的に評価していること(現状の肯定的評価)と操作的に定義しなおし、それを高齢者の

立場からの表現になるような文言にした。

「伝統的保守主義・権威主義」に関する項目

- ・権威ある人にはつねに敬意をはらわなくてはいけない
- ・青少年に何よりも必要なのは親の厳しいしつけだ
- ・今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった
- ・今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきである
- ・目上の人には、自分をおさえても従うべきである
- ・昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである
- ・何かを決めるときは従来のやり方に従っておくのが無難だ
- ・専門家や指導者の言うことに従っていれば間違いない

「同調」もしくは「現状の肯定的評価」に関する項目

- ・子どもにとって今の世の中で成長することは幸せだ
- ・昔に比べて今の時代は高齢者にとって生活しやすい
- ・外国に比べて、日本では高齢者が大事にされている
- ・なんだかんだと言っても、今の日本はよい社会だ

「革新」に関する項目

- ・法律や規則、約束ごとを破っても、自分の望みを達成したほうが勝ちだ
- ・出世や成功した人たちは、多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない
- ・現代を生き抜くためには、他人のことなど、かまっていられない

「儀礼」に関する項目

- ・自分の考えにあわない点があっても、皆の意見に合わせて穏便にことを運びたい
- ・高望みをして失敗するよりは、与えられたものに満足することが幸せにつながる
- ・自分と同じくらいの年代の人がしていることと同じことをしていれば、まず、安心である

「逃避」に関する項目

- ・競争に追い立てられるよりは気ままに生

きる方が幸せ

- ・世の中、自分の思うようにならないのだから、あきらめたほうが賢い
- ・世の中の動きは自分の生活にはあまり関係がない

「反抗」に関する項目

- ・社会の色々な問題は少しくらいの手直では解決しない
- ・今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない
- ・今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない
- ・今の日本には魅力を感じない

「アパシー」に関する項目

- ・社会活動は熱心な人にまかせておけばよい
- ・私たちが少々がんばったところで政治はよくなる
- ・政治がどうなろうと自分の生活には関係ないことだ

「アノミー」に関する項目

- ・一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない
- ・政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない
- ・今の世の中は人のことなど考えていたら損ばかりする
- ・今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く
- ・今の世の中何が正しく何が間違ってるのかわからない
- ・豊かな社会と言うが人々の生活は良くなっていない
- ・親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない
- ・他人のために苦勞するのは実にバカらしいことだ

「私的扶養」に関する項目

- ・なんだかんだと言っても、成人した子どもには、年をとった親の世話をする義務がある
- ・一般的に言って、高齢者が結婚した子供と同居した場合あまりうまくいかない
- ・家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ

「社会的扶養」に関する項目

- ・職業を持っている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事を

やめるよりも、お金をはらって誰かに世話をしてもらったほうがよい

- ・高齢者にとって、子供に援助を頼むよりは、公の援助を求める方が気が楽だ
- ・ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、子供の援助がなくても高齢者は不自由なくやっていける
- ・税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ

「地域生活」に関する項目

- ・いま住んでいるところが気に入っている
- ・いま住んでいるところに愛着がある
- ・今住んでいる地域ではよそ者という言葉が生きている
- ・近所の人たちと付き合いにはわずらわしいことが多い
- ・都会に比べて、いなかに住む老人は幸せだ

(3) 調査の方法とデータ

本稿で扱うデータは、神戸市在住の65歳以上の男女5,000人を対象とする郵送調査から得られたものの一部である。対象者の抽出方法は次の通りである。

神戸市の全9区それぞれの65歳以上の男女5歳階級別(65-70歳, 71-74歳, 75-79歳, 80歳以上)人口に5,000人を比例配分した後に各区から8つ投票区を無作為に抽出し、各投票区において選挙人名簿を用いて等間隔系統抽出を行った。

調査の期間は1999年6月から10月までであり、その間に未返送分については督促状を送った。最終的に回収されたのは2,732票であり、回収率は54.6%である。

回答者の基本的属性は次の通りである。

性別 - 男 1,200人(43.9%)、女 1,509人(55.2%)、不明 23人(0.9%)。年齢 - 不明の50人を除くと平均73.6歳(標準偏差6.3歳)、最高99歳。5歳階級別では、65-69歳 1,069人(39.9%)、70-74歳 617人(18.9%)、75-79歳 506人(18.9%)、80歳以上 490人(18.3%)。世帯形態 - 単身 414人(15.7%)、夫婦のみ 1,113人(40.7%)、核家

族 383人(14.0%)、既婚子と同居 526人(19.3%)、親と同居 51人(1.9%)、その他 149人(5.5%)、不明 96人(3.5%)。学歴 - 義務教育 1,031人(37.7%)、高校 1,122人(41.1%)、短大 188人(6.9%)、大学 182人(6.7%)、各種学校 166人(6.1%)、不明 42人(1.5%)。就学年数 - 最小 0、最大 24、平均 10.4(標準偏差 2.8年)。職の有無 - 常勤の社員・職員 135人(5.0%)、自営業主・家族従業者 251人(9.2%)、アルバイト・パート 171人(6.3%)、無職 1,997人(73.1%)、不明 176人(6.4%)。

2. 結果

(1) 回答の頻度分布

ここでは、まず、上述した社会観のカテゴリに関わりなく、取り上げた48項目の質問に対する回答を「全くそう思う」と「少しそう思う」の選択率の大きい順に並べて示しておく(図1～図3)。

上位5項目は、「全く」にしる「少し」にしる、回答者の約8割が「そう思う」と同意し、しかも、「全くそう思う」と強く同意した割合が約4割を占める項目であり、「そうは思わない」と同意しない割合が概ね1割あるいはそれ以下である。したがって、こうした意見は、大多数の高齢者に共通する社会観をであることがわかる。

それを要約すれば、今日の「青少年に何よりも必要なことは親の厳しいしつけ」であり、現代社会は「少しくらいの手直しでは解決し得ない深刻な社会問題を抱えている」にもかかわらず、「政治家や知識人は口では立派なことを言っている、本当に国民のことを考え、本気になって社会問題を解決しようとしているとは思えない」、
「役人の多くも一般庶民のことなんか真剣に考えていない」、といったところであろうか。

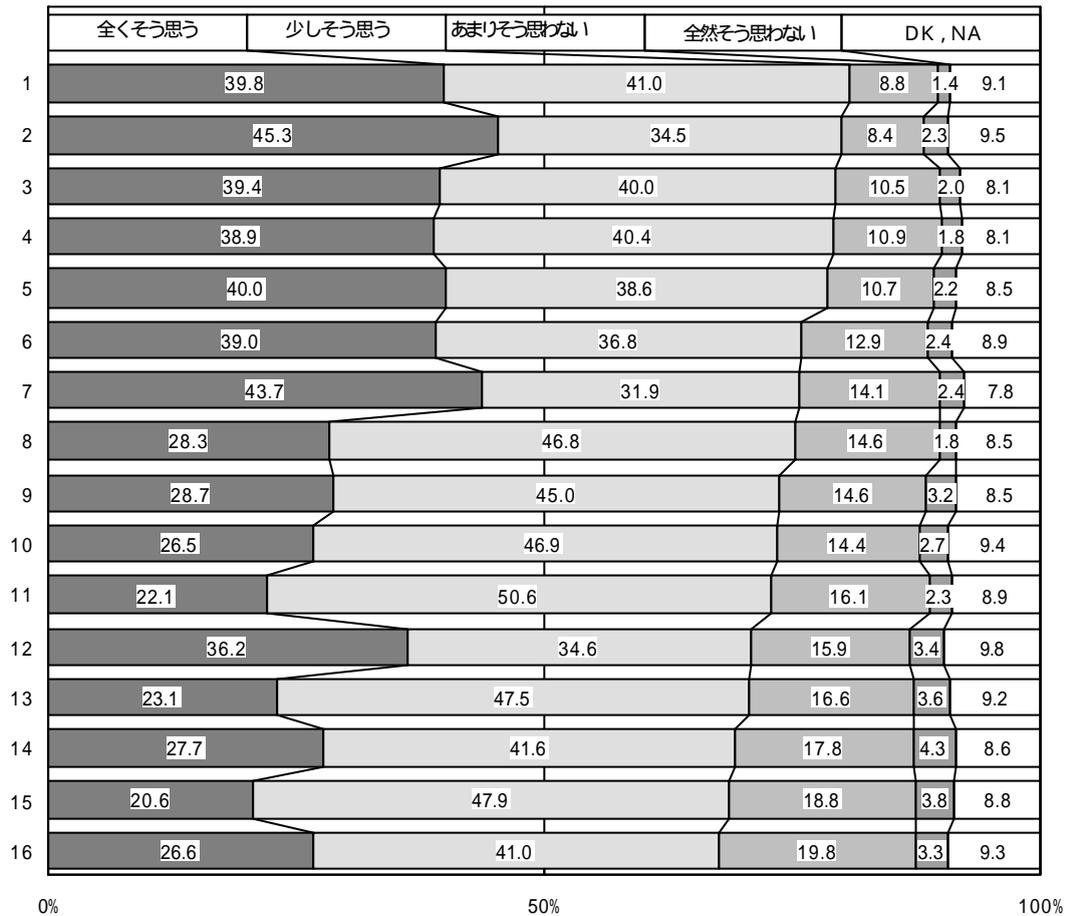


図1．社会観の頻度分布(その1)

(図中の項目番号の説明)

- 1．青少年に何よりも必要なのは親の厳しいしつけだ
- 2．社会の色々な問題は少しくらいの手直では解決しない
- 3．政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない
- 4．一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない
- 5．今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない
- 6．いま住んでいるところが気に入っている
- 7．家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ
- 8．今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった
- 9．なんだかんだと言っても、今の日本はよい社会だ
- 10．高望みをして失敗するよりは、与えられたものに満足することが幸せにつながる
- 11．昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである
- 12．いま住んでいるところに愛着がある
- 13．競争に追い立てられるよりは気ままに生きる方が幸せ
- 14．高齢者にとって、子供に援助を頼むよりは、公の援助を求める方が気が楽だ
- 15．一般的に言って、高齢者が結婚した子供と同居した場合あまりうまくいかない
- 16．豊かな社会と言うが人々の生活は良くなっていない

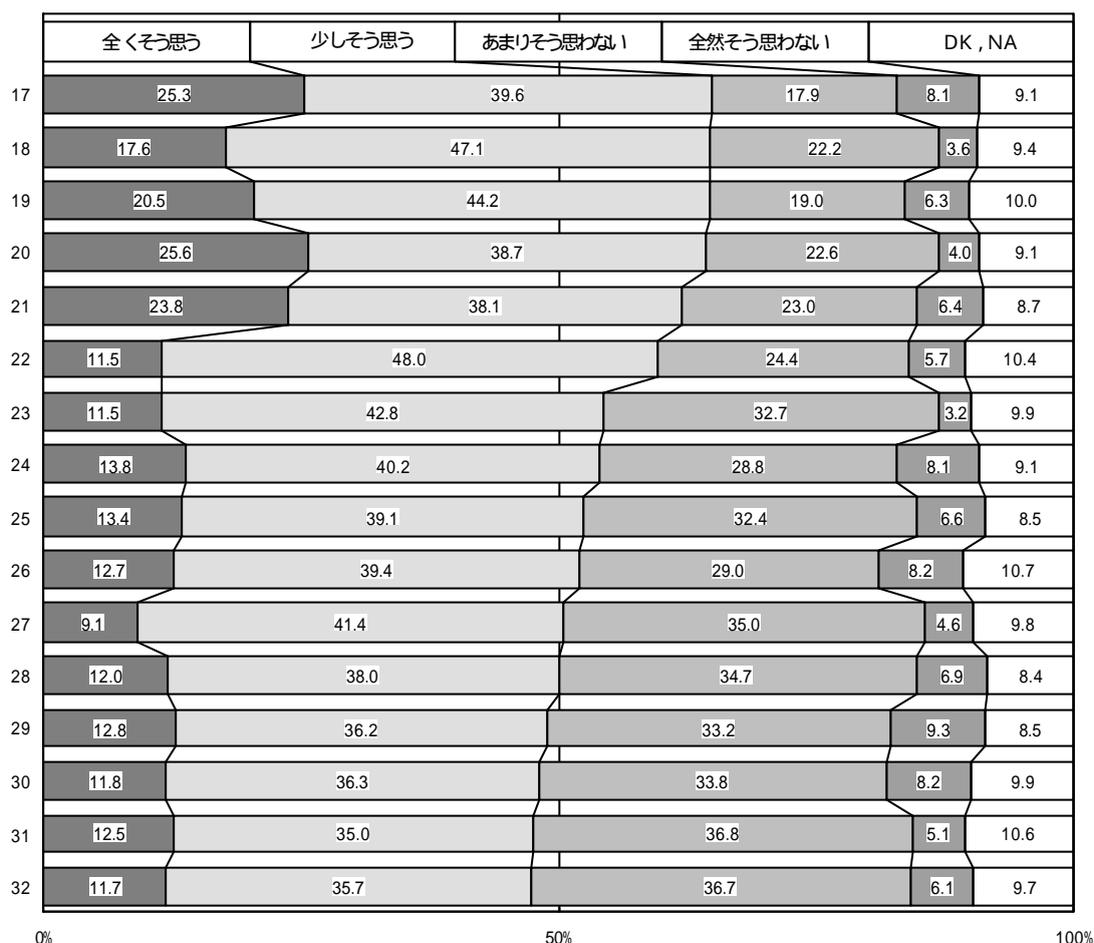


図2 . 社会観の頻度分布(その2)

17. 私たちが少々がんばったところで政治はよくなる
18. 親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない
19. 今の世の中何が正しく何が間違ってるのかわからない
20. ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、子供の援助がなくても高齢者は不自由なくやっていける
21. 昔に比べて今の時代は高齢者にとって生活しやすい
22. 自分の考えにあわない点があっても、皆の意見に合わせて音便（おんびん）にことを運びたい
23. 今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない
24. 出世や成功した人たちは、多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない
25. なんだかんだと言っても、成人した子どもには、年をとった親の世話をする義務がある
26. 職業を持っている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事をやめるよりも、お金をはらって誰かに世話をしてもらったほうがよい
27. 何かを決めるときは従来のやり方に従っておくのが無難だ
28. 自分と同じくらいの年代の人がしていることと同じことをしていれば、まず、安心である
29. 世の中、自分の思うようにならないのだから、あきらめたほうが賢い
30. 今の日本には魅力を感じない
31. 都会に比べて、いなかに住む老人は幸せだ
32. 今の世の中は人のことなど考えていたら損ばかりする

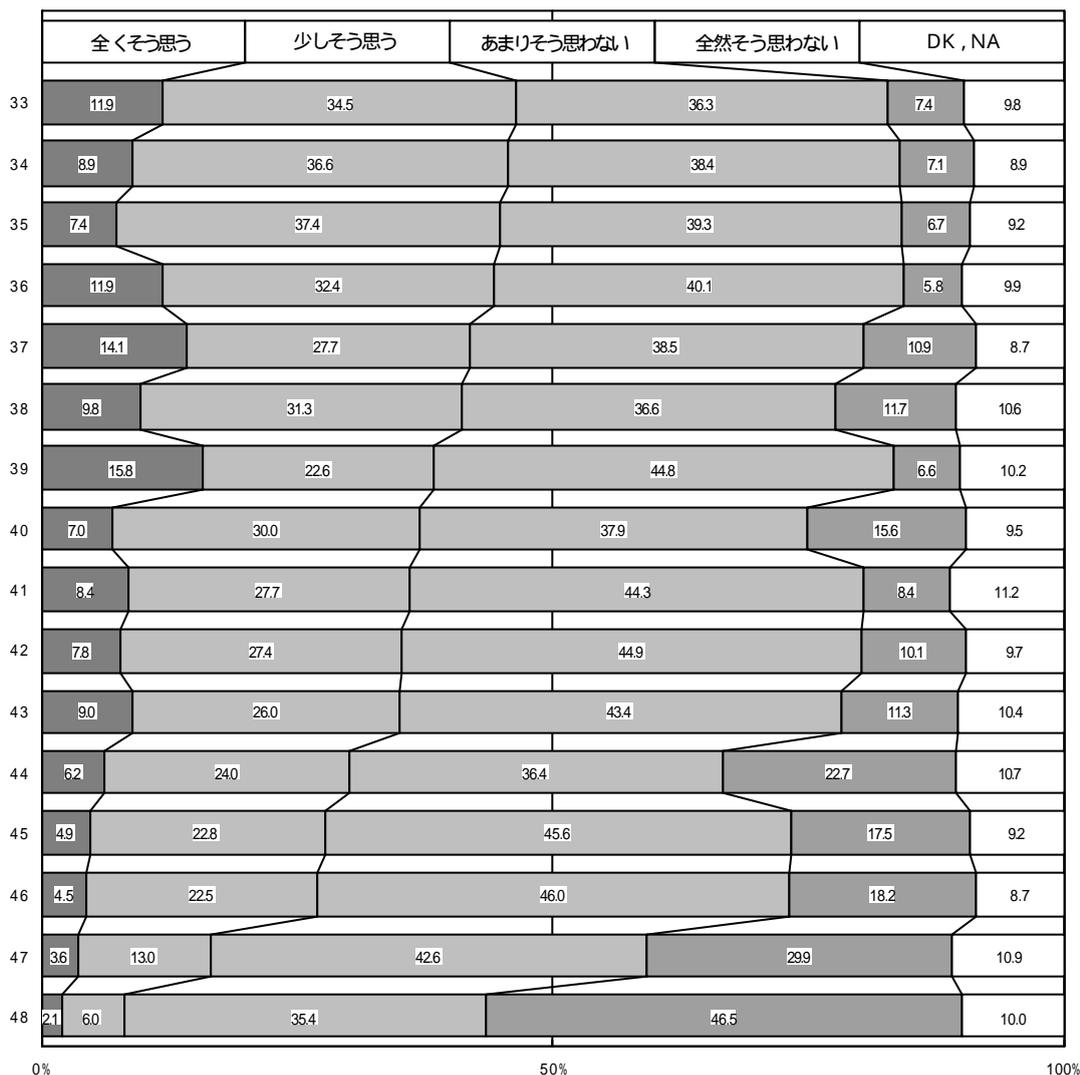


図3. 社会観の頻度分布(その3)

- 33. 社会活動は熱心な人にまかせておけばよい
- 34. 専門家や指導者の言うことに従っていれば間違いない
- 35. 目上の人には、自分をおさえても従うべきである
- 36. 税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ
- 37. 今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきである
- 38. 今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く
- 39. 子どもにとって今の世の中で成長することは幸せだ
- 40. 世の中の動きは自分の生活にはあまり関係がない
- 41. 外国に比べて、日本では高齢者が大事にされている
- 42. 他人のために苦勞するのは実にバカらしいことだ
- 43. 権威ある人にはつねに敬意をはらわなくてはいけない
- 44. 政治がどうなろうと自分の生活には関係ないことだ
- 45. 近所の人たちと付き合いにはわずらわしいことが多い
- 46. 現代を生き抜くためには、他人のことなど、かまっていられない
- 47. 今住んでいる地域ではよそ者という言葉が生きている
- 48. 法律や規則、約束ごとを破っても、自分の望みを達成したほうが勝ちだ

「青少年に何よりも必要なことは親の厳しいしつけだ」というのは、いつの時代でも上の世代が下の世代に対して向ける訓戒的意見とみなせば、今日の高齢者の大多数がそうした意見に同意していることは別段不思議なことでも特異なことでもないといえるだろうが、政治家や役人に対する批判的見解あるいは不信感ともいえるような意見に対して高齢者の大多数が同意していることは注目されることである。

ところで、各項目の回答を性別、年齢別、学歴別、世帯形態別にみたときにカイ2乗検定で有意差が認められたものを摘記すると次の通りである。なお、括弧内は有意水準で、それぞれの属性別検定結果であり、以下の記述は、例えば、「女性($p<0.05$)」と記されている場合は、性別のカイ2乗検定の結果が5%水準で有意であり、断り書きがない限り、その意見に対して女性に同意する人が多いことを示している。また、年齢に関しては、上述の5歳階級別年齢層における前半(65-69歳および70-74歳)を低年齢層、後半(75-79歳、80歳以上)を高年齢層と呼んでおく。

「青少年に何よりも必要なことは、親の厳しいしつけだ」は単身世帯の高齢者に同意しない人が多い($p<0.05$)。「社会の色々な問題は、少しくらいの手直では解決しない」は女性($p<0.05$)と低学歴層($p<0.05$)に同意する人が多い。「政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない」は、低年齢層($p<0.05$)と低学歴層($p<0.01$)に同意する人が多い。「一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない」は、女性($p<0.05$)と低学歴層($p<0.05$)に同意する人が多い。「今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない」は低年齢層($p<0.05$)に同意する人が多い。

6位から8位までは、「全くそう思う」

と「少しそう思う」を合計した割合がほぼ75%を占める項目である。それらは、「いま住んでいるところが気に入っている」(女性 $p<0.001$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.05$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.001$)、「家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ」(女性 $p<0.01$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.05$)、「今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった」(低学歴層 $p<0.01$ 、単身世帯 $p<0.001$)の3項目である。

「全く」と「少し」の選択率に大きな違いがあり、「家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ」は「全くそう思う」割合が4割を超えているのに対して、「今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった」は3割弱であるが、総じて言えることは、「高齢者にとって家族が大切にしてくれることが何よりも幸せなこと」であり、「いま住んでいるところが気に入っている」ものの、「いまの世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった」と多くの高齢者が考えている、ということである。

9位から16位までは、回答者の約7割が同意した項目である。それらは、「なんだかんだと言っても、いまの日本はよい社会だ」(属性別の有意差なし)、「高望みをして失敗するよりは、与えられたものに満足することが幸せにつながる」(女性 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.001$)、「昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである」(高年齢層 $p<0.05$ 、低学歴層 $p<0.01$)、「いま住んでいるところに愛着がある」(女性 $p<0.01$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.05$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.001$)、「競争に追い立てられるよりは気ままに生きる方が幸せ」(高年齢層 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.001$)、「高

年齢にとって、子どもに援助を頼むよりは、公の援助を求める方が気が楽だ」(低年齢層 $p < 0.001$ 、低学歴層 $p < 0.001$)、「一般的に言って、結婚した子どもと同居した場合あまりうまくいかない」(高学歴層 $p < 0.05$ 、単身世帯および夫婦のみの世帯 $p < 0.001$)、「豊かな社会と言うが人々の生活は良くなっていない」(女性 $p < 0.05$ 、低学歴層 $p < 0.001$)である。

17位から22位までは約6割が同意した項目である。高齢者が「少々がんばったところで政治はよくなる」(女性 $p < 0.001$ 、低学歴層 $p < 0.001$)、といい、「今の世の中何が正しくて何が間違っているのかわからない」(女性 $p < 0.001$ 、低学歴層 $p < 0.001$)し、「親しい間柄といってもいざとなったら信頼できない」(低学歴層 $p < 0.001$)が、「昔に比べて今の時代は高齢者にとって生活しやすい」(高年齢層 $p < 0.05$)という。そして、「ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、子どもの援助がなくても高齢者は不自由なくやっていける」(低年齢層 $p < 0.05$ 、低学歴層 $p < 0.01$ 、単身世帯および夫婦のみの世帯 $p < 0.001$)といい、「生きていく上では「自分の考えにあわない点があっても皆の意見に合わせて穏便にことを運びたい」(女性 $p < 0.001$ 、高年齢層 $p < 0.01$ 、低学歴層 $p < 0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p < 0.05$)と考えている。

23位から34位までは、ほぼ半数の高齢者が同意した項目である。それらを順に並べれば次の通りである。

「今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない」(高年齢層 $p < 0.01$)、「出世や成功した人たちは多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない」(低学歴層 $p < 0.05$)、「なんだかんだと言っても、成人した子どもは親の世話をする義務がある」(高年齢層 $p < 0.001$ 、低学歴層 $p < 0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p < 0.01$)、「職業をもつ

ている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事をやめるよりも、お金を払って誰かに世話をしてもらったほうがよい」(高学歴層 $p < 0.001$ 、単身世帯 $p < 0.01$)、「何かを決めるときには従来のやり方に従っておけば無難だ」(女性 $p < 0.05$ 、高年齢層 $p < 0.001$)、「自分と同じくらいの年代の人がしていることと同じことをしていれば、まず、安心である」(女性 $p < 0.001$ 、高年齢層 $p < 0.001$ 、低学歴層 $p < 0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p < 0.001$)、「世の中、自分の思うとおりにならないのだから、あきらめた方が賢い」(女性 $p < 0.001$ 、高年齢層 $p < 0.001$ 、低学歴層 $p < 0.001$)、「今の日本には魅力を感じない」(属性別の有意差なし)、「都会に比べて、田舎に住む老人は幸せだ」(低学歴層 $p < 0.01$)、低学歴層 $p < 0.001$)、「今の世の中は人のことなど考えていたら損ばかりする」(低学歴層 $p < 0.001$)、「社会活動は熱心な人にまかせておけばよい」(女性 $p < 0.001$ 、高年齢層 $p < 0.001$ 、低学歴層 $p < 0.001$)、「専門家や指導者のいうことに従っていれば間違いはない」(女性 $p < 0.05$ 、高年齢層 $p < 0.001$ 、低学歴層 $p < 0.001$)。

35位以下は同意しない割合が同意する割合を上回った項目である。とくに、「法律や規則、約束事を破っても自分の望みを達成した方が勝ちだ」(男性が強く否定 $p < 0.05$ 、高学歴層が強く否定 $p < 0.01$)という意見と「いま住んでいる地域ではよそ者という言葉が生きている」(女性 $p < 0.05$ 、高年齢層 $p < 0.05$ 、低学歴層 $p < 0.05$ 、単身世帯および既婚子との同居世帯 $p < 0.05$)という意見に同意する高齢者の割合は10～15%と他の項目に比べて極端に小さくなっている。

「現代を生き抜くためには他人のことなどかまっていられない」(低学歴層 $p < 0.001$)および「他人のために苦労することはばからしいことだ」(低学歴層 $p < 0.001$)という

意見に同意する高齢者も少ない。多くの高齢者は無規範的あるいは利己主義的な態度や行動には否定的であることがわかる。

「政治がどうなろうと自分の生活には関係ない」(女性 $p<0.001$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$)や「世の中の動きは自分の生活に関係がない」(女性 $p<0.001$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$)、「今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く」(女性 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、単身世帯 $p<0.05$)という意見への同意率も小さい。高齢者の中で、政治的・社会的無関心層は少数派であることがわかる。

また、「権威ある人には常に敬意を払わなくてはならない」(高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.01$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.001$)、「今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきだ」(女性 $p<0.01$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.05$)、「目上の人には、自分を抑えても従うべきである」(男性は強く同意する人と強く同意しない人の両極に分かれる $p<0.01$ 、高年齢層 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.01$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.05$)という意見に同意する高齢者も少数派である。この結果は、既に述べたように、高齢者の多くは決して保守的ではない、というこれまでの多くの研究を裏打ちするものといえそうである。

「近所の人たちとの付き合いにはわずらわしいことが多い」(属性別の有意差なし)という高齢者は少ない。また、「外国に比べて日本では高齢者が大事にされている」(高年齢層 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.001$)、「子どもにとって今の世の中で成長することは幸せだ」(男性 $p<0.01$ 、高年齢層 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.01$)という高齢者も少なく、「税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ」(高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.05$)と考えている

高齢者も少ない。

(2) 主成分分析による測定項目の再分類

上述の回答結果に基づいて、当初設定した項目の分類を検討するために、48項目すべてにもれなく回答した完全回答票1,850票を用いて、「全くそう思う」に4点、「少しそう思う」に3点、「あまりそう思わない」に2点、「全くそう思わない」に1点を与えて各項目を数値変数化し、それらを用いて主成分分析を行った。

固有値 1.0 以上の主成分が 11 個抽出された。各主成分の寄与率(全変数の分散の合計に対してその主成分によって説明される分散のパーセント)はいずれも小さく、累積寄与率も 55%にとどまるが、各項目は比較的明瞭に類別されている(表 2)。

10 項目から構成されている第 1 主成分が何を指しているか一言では表現しにくい。当初設定した分類に従えば、「逃避」(表 1 の中の第 1 主成分に所属する項目のうちで最上位に記載されている負荷量 0.70 の項目と 5 番目の負荷量 0.58 および 6 番目の同 0.57 の項目)や「儀礼」(2 ~ 4 番目の項目)、「政治的・社会的アパシー」を内容とする項目(7 ~ 9 番目の項目)、そして、ストロールのアノミー尺度の項目にあげられていた 1 項目(負荷量 0.47 の「明日は明日の風が吹く」)が含まれている。

7 項目から構成されている第 2 主成分は、「アノミー」の項目(1 ~ 2 番目および 6 ~ 7 番目の項目)と「反抗」の項目(3 ~ 5 番目)から成っている。

第 3 主成分には当初設定した「伝統的権威主義・保守主義」の 8 項目のうちの 6 項目が含まれており、一見して「伝統的権威主義・保守主義」を表す主成分であることがわかる。

第 4 主成分は、当初設定した「革新」の項目(1、2 および 5 番目の項目)とアノミ

表 1 . バリマックス回転後の主成分行列 (その 1)

項 目	主 成 分										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
世の中、自分の思うようにならないのだから、あきらめたほうが賢い	0.70										
高望みをして失敗するよりは、与えられたものに満足することが幸せにつながる	0.65										
自分の考えにあわない点があっても、皆の意見に合わせて、穏便にことを運びたい	0.65										
自分と同じくらいの年代の人がしていることと同じことをしていれば、まず、安心である	0.59		0.32								
世の中の動きは自分の生活にはあまり関係がない	0.58			0.40							
競争に追い立てられるよりは、気ままに生きる方が幸せ	0.57										
社会活動は、熱心な人にまかせておけばよい	0.53		0.32								
政治がどうだろうと自分の生活には関係ないことだ	0.52			0.48							
私たちが少々がんばったところで、政治はよくなるらない	0.52										
今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く	0.47			0.31							0.31
政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない		0.84									
一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない		0.82									
今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない		0.81									
今の日本には魅力を感じない		0.64									
社会の色々な問題は、少しくらいの手直では解決しない		0.61									

(次表に続く)

表 1 . バリマックス回転後の主成分行列 (その 2)

(前表からの続き)

項 目	主 成 分											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
豊かな社会と言うが、人々の生活は良くなっていない		0.54										0.38
今の世の中、何が正しく何が間違ってるのかわからない	0.34	0.38										0.36
目上の人には、自分をおさえても従うべきである			0.73									
今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきである			0.67									
昔からあるしきたりや習慣は、今日でも大切にすべきである			0.65									
専門家や指導者の言うことに従っていれば間違いない	0.33		0.63									
何かを決めるときは、従来のやり方に従っておくのが無難だ	0.36		0.61									
権威ある人には、つねに敬意をはらわなくてはいけない			0.58									
現代を生き抜くためには、他人のことなどは、かまっていられない				0.64								
法律や規則、約束ごとを破っても、自分の望みを達成したほうが勝ちだ				0.58								
他人のために苦労するのは、実にバカらしいことだ				0.57								
今の世の中は、人のことなど考えていたら損ばかりする		0.42		0.48								
出世や成功した人たちは、多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない		0.34		0.40								
昔に比べて今の時代は高齢者にとって生活しやすい					0.75							

(次表に続く)

表 1 . バリマックス回転後の主成分行列 (その 3)

(前表からの続き)

項 目	主 成 分											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
外国に比べて、日本では高齢者が大事にされている					0.73							
なんだかんだと言っても、今の日本はよい社会だ					0.61							
子どもにとって、今の世の中で成長することは幸せだ					0.51							
都会に比べて、いなかに住む老人は幸せだ												
高齢者にとって、子どもに援助を頼むよりは、公の援助を求める方が気が楽だ						0.77						
ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、子供の援助がなくても、高齢者は不自由なくやっていける						0.74						
職業を持っている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事をやめるよりも、お金をはらって誰かに世話をしてもらったほうがよい						0.66						
一般的に言って、高齢者が結婚した子どもと同居した場合、あまりうまくいかない						0.40						-0.37
いま住んでいるところが気に入っている							0.93					
いま住んでいるところに愛着がある							0.92					
今の世の中は、義理人情がすたれて暮らしにくくなった								0.68				
青少年に何よりも必要なのは親の厳しいしつけだ								0.67				
親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない		0.35		0.36					0.38			

(次表に続く)

表1 . バリマックス回転後の主成分行列 (その4)

(前表からの続き)

項 目	主 成 分											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ									0.63			
なんだかんだと言っても、成人した子どもには、年をとった親の世話をする義務がある									0.56			
今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない									0.56			
家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ									0.33			
近所の人たちと付き合いにはわずらわしいことが多い										0.79		
今住んでいる地域では、よそ者という言葉が生きている										0.75		
寄与率(%)	8.8	8.7	6.8	5.5	4.6	4.3	3.9	3.7	3.3	3.2	2.3	
累積寄与率(%)		17.5	24.3	29.8	34.4	38.6	42.5	46.2	49.5	52.7	55.0	

注：完全回答1,850票に関する分析

一の項目(3、4番目)から成っている。

第5主成分は、当初設定した「同調」に関する項目で構成されており、現在の日本社会に対する「現状肯定」を表す主成分と解釈できる。

第6主成分は、同居に否定的な見解の項目(4番目にある負荷量 0.40 の当初設定した「私的扶養」の項目)と「社会的扶養」の3項目から成っていることから、「社会的扶養」を表す主成分と解釈できる。

第7主成分は「地域生活」に対する肯定的評価を表す主成分で、その逆の内容の主成分が第10主成分である。

第8主成分は、「伝統的権威主義・保守主義」の項目(1、2番目の項目)とアノミー項目(3番目)からなっているが、この項目群からいえば、今日の人間関係に対する

批判あるいは否定的な人間関係観を表す主成分と解釈することができよう。

第9主成分は、当初設定した「社会的扶養」の項目(1番目の負荷量 0.63 の項目)と「反抗」(3番目の負荷量 0.56 の項目)、「私的扶養」の項目(残りの2項目)から構成されている。この項目群が指していることは、高齢者は扶養あるいは支援の対象として大事にされるべきであるという認識(高齢者尊重認識)と解釈することができよう。

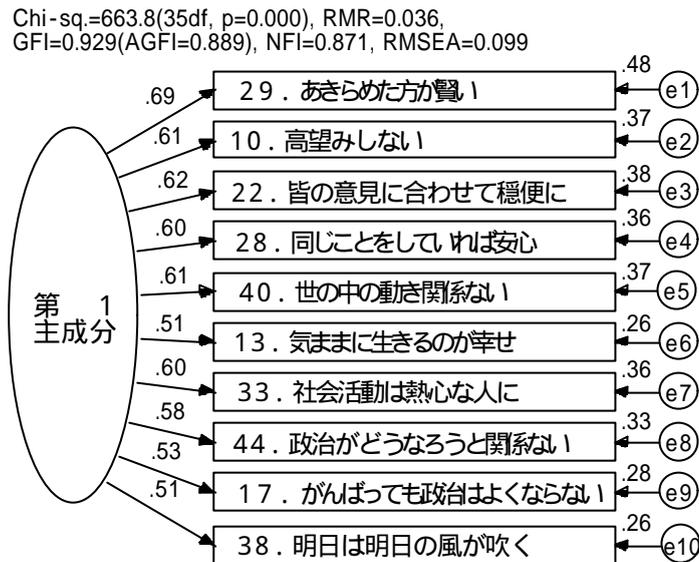
第11主成分に所属する項目の負荷量はいずれも小さく、より大きな負荷量で他の主成分に所属するものばかりであるので、検討から除外する。

以上のように、「逃避」、「儀礼」、「アパシー」の項目が、また、「アノミー」と「反

抗」の項目が、「アノミー」と「革新」の項目が、それぞれ同一主成分に所属していることなど、当初設定した社会観測定項目の分類と若干異なる結果になった。そこで、まず、10個の主成分に基づいて構成される主成分モデルを共分散構造分析によって検討し、次に、それらの結果を踏まえてモデルの改善を図ることとする。

(3) 第1主成分モデル

第1主成分には、当初は「逃避」(項目 29、40、13)、「儀礼」(項目 10、22、28)、「アパシー」(項目 33、44、17)、「アノミー」(項目 38)のそれぞれ別個に設定した項目が混在している。それら9項目で構成される1因子モデル(図4)は、適合度はそれほど悪いものではないが、このモデルが示す内容は判然としない。



各観測変数に付された番号は図1～図3の項目番号と同じ。以下の図においても同様

図4. 第1主成分モデル(標準化推定値)

そこで、この1因子モデルの諸項目を当初設定した項目ごとに再分類して3因子モデルにしたのが図5である。図4の1因子モデルに比べて、この3因子モデルでは各項目(観測変数)の負荷量が大きくなり、適合度も改善されている。

以上のことから、第1主成分を「逃避」、「儀礼」、「アパシー」の3次元構造でとらえた方が適切であることになる。そして、この3因子モデル(図5)から、当初設定した「逃避」、「儀礼」、「アパシー」といった適応類型は相互に関連性が高いこと、項目38は、当初はタンストールに倣って「ア

ノミー」を構成する項目として設定したが、むしろ「アパシー」の項目とする方が適切であることがわかる。

既に触れたが、マートン(1957)の述べることに従えば、「逃避」は「アパシー」の適応様式であり、「儀礼」という適応様式は、また、文化的目標をめざす競争につきまとう危険や欲求不満から「逃避」するための適応様式として理解される。いうまでもなく、マートンは高齢者の適応様式を論じたわけではないが、図5に示した3因子モデルは、「逃避」と「アパシー」、「儀礼」と「逃避」のそれぞれが極めて高い相

関にあることを示しており、かれの適応様式論を図らずも実証したことになったといえそうである。マートンは述べてはいるが、この3因子モデルにおける「儀礼」と

「アパシー」との間の高い相関関係は、「儀礼」も、また、「逃避」と同様に「アパシー」の適応様式であることを示している。

Chi-sq=479.237(32 df, p=0.000), RMR=0.031,
GFI=0.948(AGFI=0.911), NFI=0.907, RMSEA=0.087

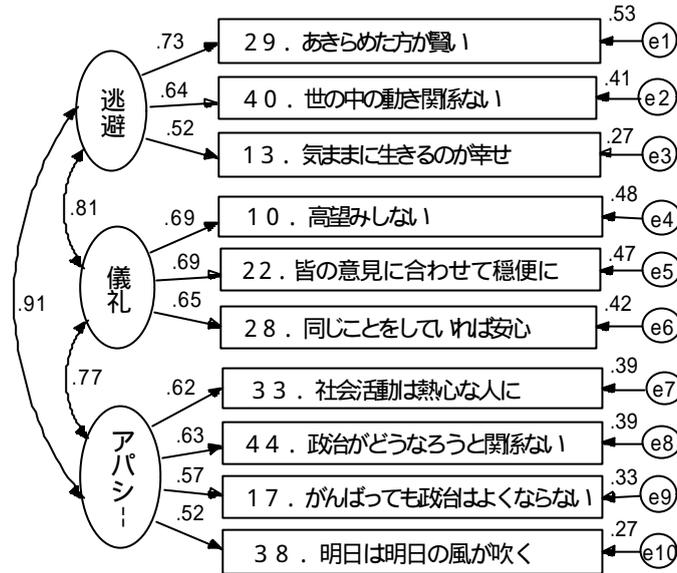


図5. 「第1主成分モデル」の3因子モデル(標準化推定値)

(4) 第2主成分モデル

1因子の第2主成分モデルは、当初設定の「アノミー」(項目3, 4, 16, 19)と「反抗」(5, 30, 2)の項目で構成されている

(図6)。カイ2乗値は別にして、RMSEAを除く他の指標では比較的良好な適合度を示している。

Chi-sq=329.461(14 df, p=0.000), RMR=0.031,
GFI=0.950(AGFI=0.900), NFI=0.931, RMSEA=0.110

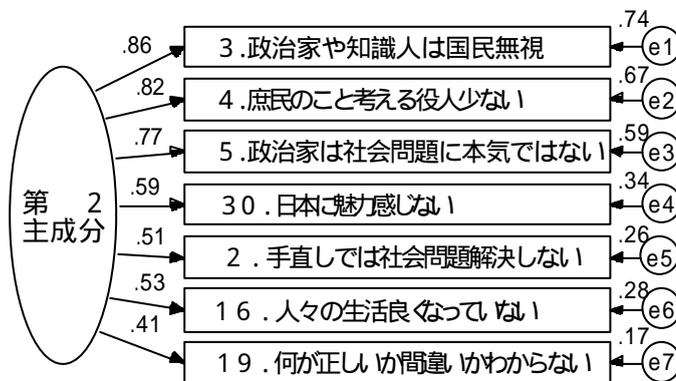


図6. 第2主成分の1因子モデル(社会的不信感)モデル(標準化推定値)

この第2主成分モデルは、社会に対する不信感ないしは厭世観を表しているといえるが、「アノミー」と「反抗」を構成する

それぞれの項目を類別して2因子モデルに再編成したのが図7である。

Chi-sq.=292.310(13 df, p=0.000), RMR=0.032,
GFI=0.954(AGFI=0.902), NFI=0.939, RMSEA=0.108

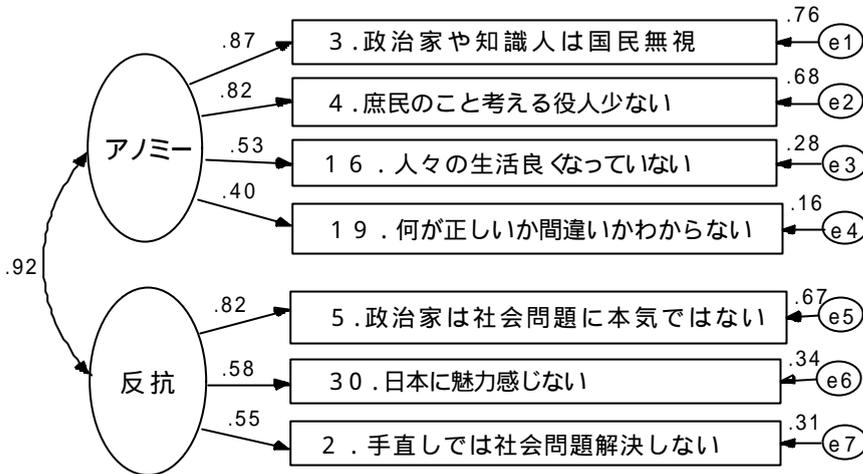


図7. 第2主成分の2因子モデル(標準化推定値)

適合度はほんのわずか改善されたにすぎず、RMSEAは許容範囲を若干上回ったままであるが、1因子の第2主成分モデルよりは、この2因子モデルの方が高齢者の社会観を明らかにする上で、はるかにわかりやすいモデルであるといえよう。

・保守主義」的社会観の当初設定した8つの項目のうち6項目から構成されている(図8)。当初設定した項目群から除外された項目は、「今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった」と「青少年に何よりも必要なのは、親の厳しいしつけだ」である。この1因子モデルの適合度は概ね良好と判断されるが、RMSEAの値が一般的基準を超えている。

(5) 第3主成分モデル

第3主成分モデルは、「伝統的権威主義

Chi-sq.=196.3(9df, p=0.000), RMR=0.025,
GFI=0.966(AGFI=0.921), NFI=0.928, RMSEA=0.106

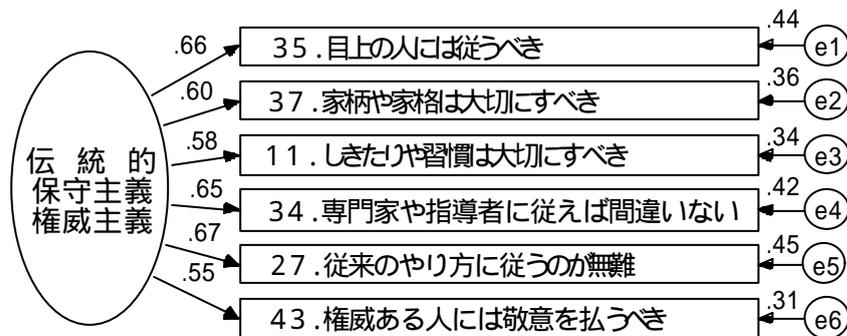


図8. 第3主成分モデルの1因子モデル(標準化推定値)

当初設定した「伝統的権威主義・保守主義」に所属しなかった2項目を含めて2因子モデルにしたのが図9である。

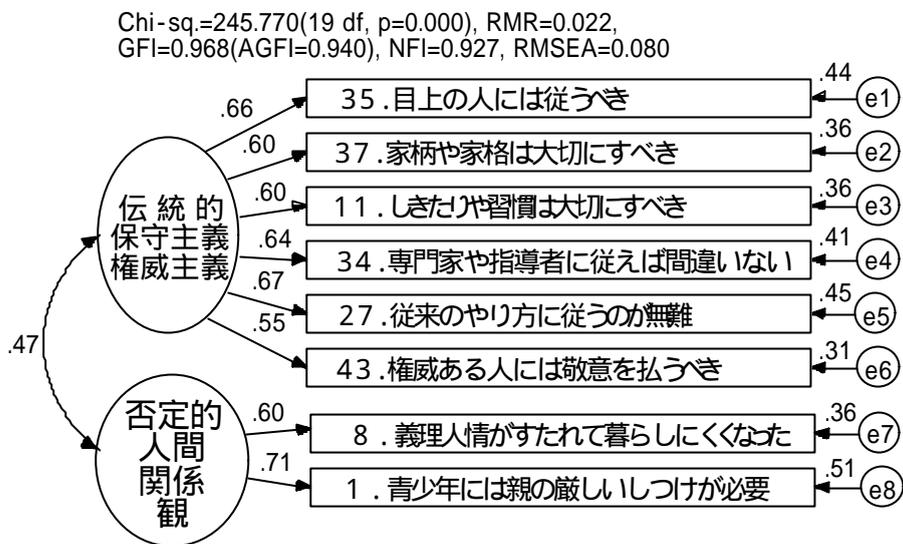


図9. 「伝統的権威主義・保守主義」の2因子モデル(標準化推定値)

1因子モデルよりもRMRとRMSEAの値が小さくなり、適合度が少しばかり改善されている。この2項目は、前掲の表2に見るように、「親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない」という項目とともに第8主成分を構成している。

第8主成分は、今日の社会における人間関係に対する否定的な評価(それを、ここでは否定的人間関係観と名付けておく)を

表す主成分と解釈できる。そこで、第3主成分と第8主成分をそれぞれ1因子とする2因子モデルに編成し直したのが図10である。適合度指標に見るように、この2因子モデルの適合度は良好である。この2因子モデルが伝えていることは、「伝統的権威主義・保守主義」的社會観を持つ人は、今日の社会における人間関係に対して否定的な見方をしているということである。

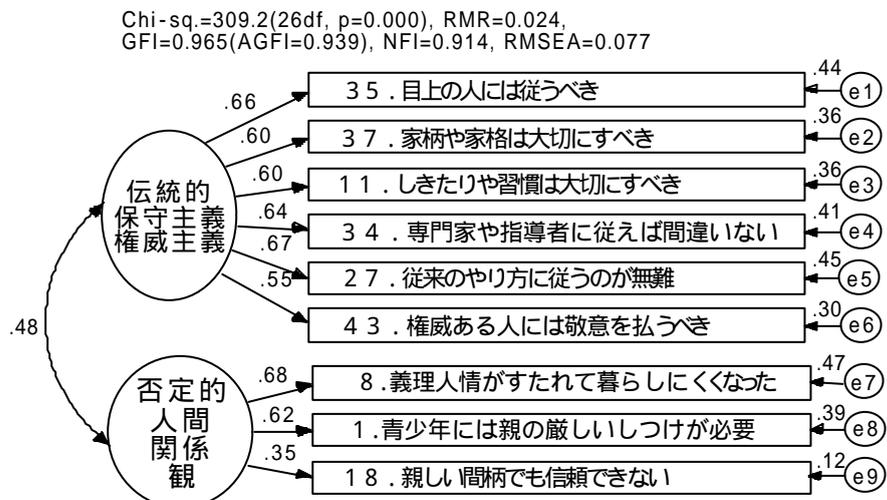


図10. 第3主成分と第8主成分による2因子モデル(標準化推定値)

(6) 第4主成分モデル

第4主成分は、「革新」の項目として設定した3項目(項目番号46、48、24)すべてと、「アノミー」の8項目のうちの2項目(42、32)によって構成されている(表2)。

それら5項目で構成される1因子モデルが図11である。適合度判定諸指標は、このモデルの適合度が極めて高いことを示している。

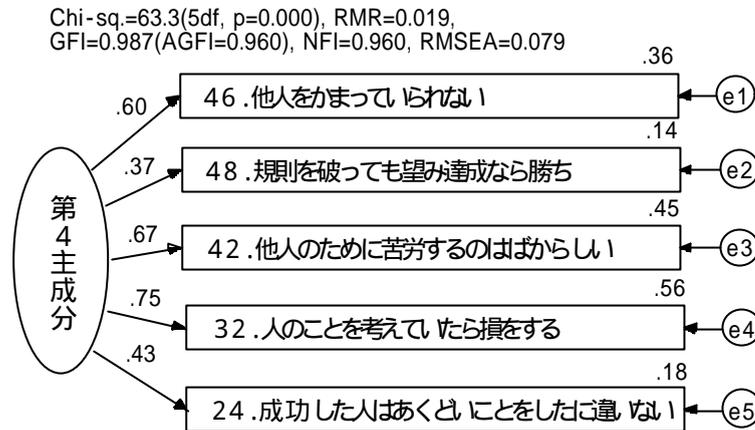


図11. 第4主成分の1因子モデル(標準化推定値)

この1因子モデルを、当初設定した項目ごとに振り分けて2因子モデルに再構成したのが図12である。各負荷量および適合度指標の数値がどれもが改善されており、第4主成分モデルを2因子構造のモデルと

する方がより適切であることがわかる。そして、このモデルから、「革新」と「アノミー」とは高い相関関係にあることが理解される。

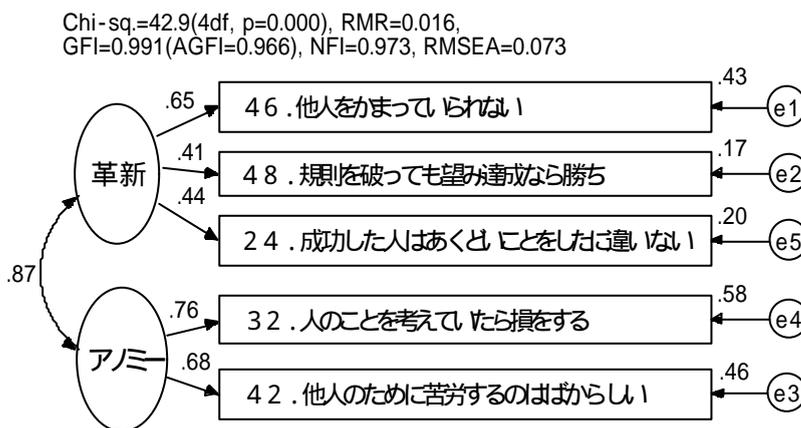


図12. 第4主成分モデルの2因子モデル(標準化推定値)

(7) 第5主成分モデル

第5主成分を構成する4項目は、当初設定した「同調」の4項目すべてで構成されているので、これを「同調」の1因子モデルとする(図13)。

適合度の判定諸指標が示すように、このモデルの適合度は極めて良好である。

Chi-sq=5.7(2df, p=0.058), RMR=0.009,
GFI=0.998(AGFI=0.992), NFI=0.995, RMSEA=0.032

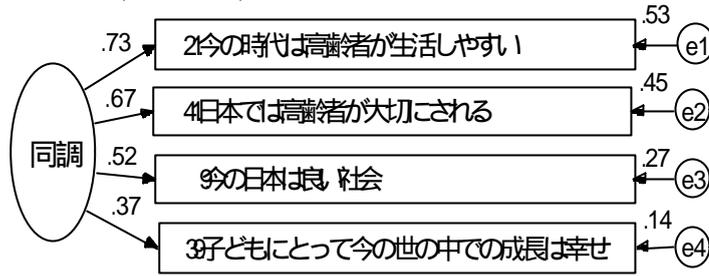


図13. 第5主成分「同調」の1因子モデル(標準化推定値)

(8) 第6主成分モデル

第6主成分モデルは、当初設定した「社会的扶養」の4項目のうちの1項目「税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ」(項目36)に代わって、「私的扶養」の3項目のうちの1項目「一般的に言って、高齢者が結婚した子どもと同居した場合あまりうまくいかな

い」(項目15)が加わった4項目から構成されている(図14)。

この1因子モデルの適合度は極めて良好である。したがって、当初設定した4項目に代えて、この第6主成分に所属する4項目で構成されるモデルを「社会的扶養志向」モデルとする。

Chi-sq=5.5(2df, p=0.065), RMR=0.008,
GFI=0.999(AGFI=0.993), NFI=0.995, RMSEA=0.031

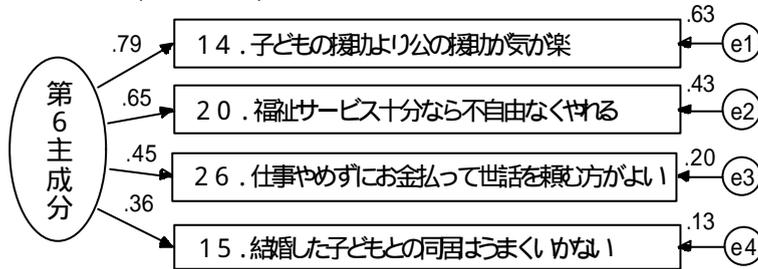


図14. 第6主成分モデルの1因子モデル(「社会的扶養志向」モデル)
(標準化推定値)

(9) 第9主成分モデル

共分散構造分析では、2つの観測変数から成る1因子モデルは、推定されるパラメータの数(4)が標本積率の数(3)を超えてしまい、自由度(3-4)が負値(-1)となってモデルが識別されなくなる。また、3つの観測変数から成る1因子モデルでは、推定されるパラメータの数(6)と標本積率の数(6)が同数になって自由度(6-6)が

ゼロの飽和モデルになるから適合度の判定ができなくなる(適合度を判定する必要がなくなる)。それぞれ、2項目、3項目、2項目から成っている第7、第8、第10主成分に基づく3つの主成分モデルが、これらに当たる。第8主成分に関しては第3主成分モデルについて検討したときに取り上げたが、第7と第10主成分に関しては後に取り上げることにして、先に第9主成

分モデルについて検討する。

第9主成分は、当初設定した「社会的扶養」の諸項目のうちの1項目(項目36)と「反抗」の1項目(項目23)、「私的扶養」の2項目(項目25と7)の4項目から構成されており、家族も社会も高齢者を大切に

扶養すべきであるという敬老観を表す主成分と解釈することができよう。この4項目による1因子モデル(図15)の適合度は概ね良好であると判断されるが、NFIとRMSEAが既に述べた一般的な基準値を満たしていない。

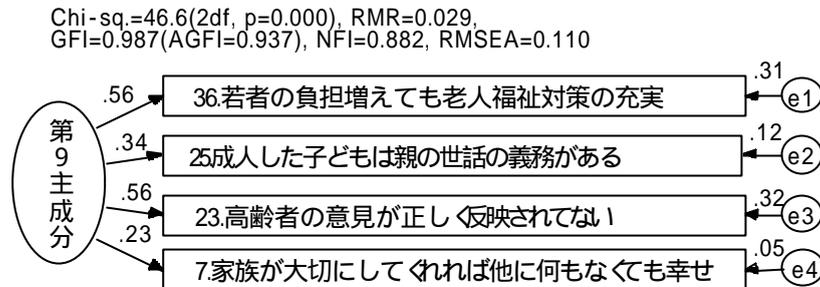


図15. 第9主成分モデルの1因子モデル(標準化推定値)

4つの項目を見直すと、家族に関すること(項目25と7)と社会に関すること(項目36と23)の2グループに分けることができそうである。そこで、第9主成分モデルを「老人福祉」観と「家族意識」を潜在変数とする2因子モデルに再構成したのが図16である。各因子の負荷量が1因子モ

デルよりも若干ではあるが大きくなり(したがって、重相関係数の平方値も大きくなって項目の信頼性が上昇し)、適合度も大きく改善されている。この2因子モデルは、「敬老観」モデルと名づけることができよう。

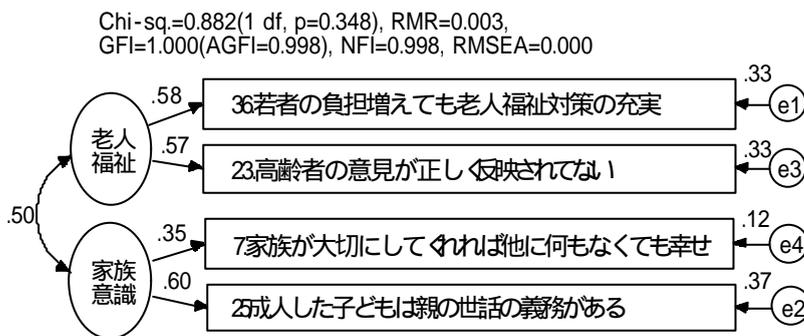


図16. 第9主成分モデルの2因子モデル(「敬老観」モデル)(標準化推定値)

ところで、家族の高齢者扶養の問題は、日本家族の伝統性と関連させて論議されることが少なくないが(小田,1992)、この「敬老観」モデルで示されている高齢者の「家族意識」と「伝統的保守主義・権威主義」

との関係をモデル化したのが図17である。このモデルは、前掲の図9の2因子モデルに「家族意識」を組み込んで3因子モデルとしたものである。各種の適合度指標は、このモデルが適合度の高い良好なモデルで

あることを示している。このモデルから、「家族意識」が「伝統的保守主義・権威主義」的社會観および「否定的人間關係観」とも高い相関關係にあることがわかる。

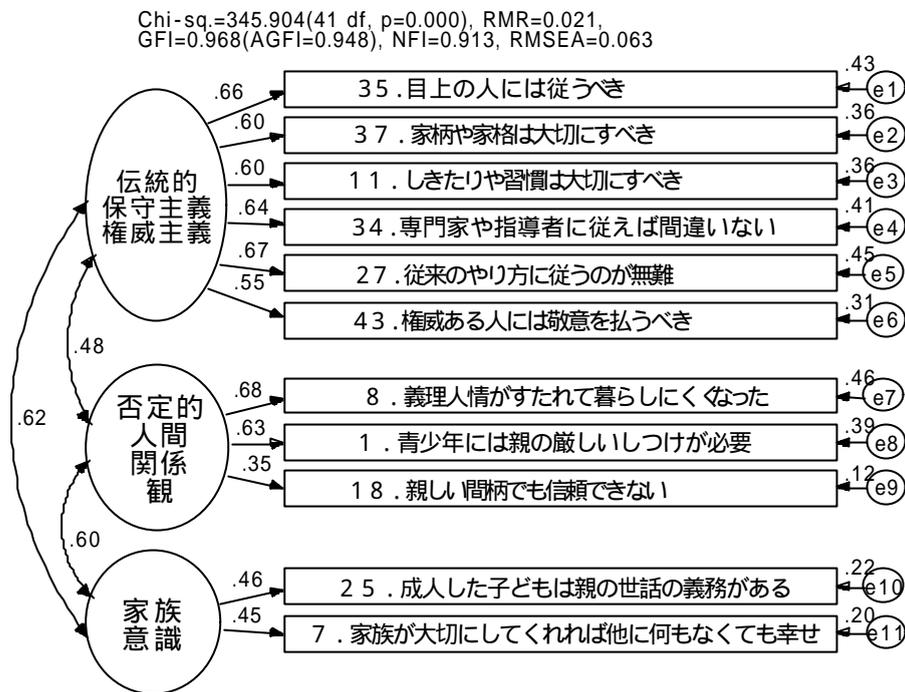


図17. 「伝統的保守主義・権威主義」社會観の3因子モデル (標準化推定値)

(10) 第7主成分および第10主成分

この2つの主成分は、それぞれ単独では因子モデルを構成できないことを述べたが、その両者ともに地域生活あるいは地域社會に関するものであるため、その両者を統合して地域社會観の1因子モデルとしたのが図18である。

この1因子モデルは、負荷量に極端に小さいものがあるとともに RMSEA が一般的基準値を大きく上回っていて適合度が低いからモデルとしての適切性を欠く。そこで、各主成分をそれぞれ「肯定的地域社會観」と「否定的地域社會観」という潜在変数にして2因子モデルにしたのが図19である。



図18. 第7・第10主成分から構成された地域社會観の1因子モデル (標準化推定値)

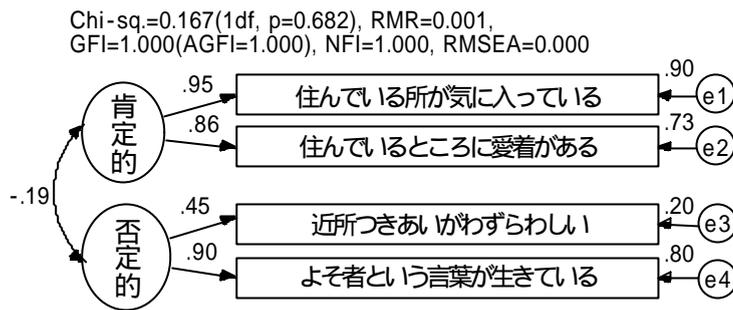


図19．第7・第10主成分から構成された地域社会観の2因子モデル
(標準化推定値)

この2因子モデルは、負荷量および適合度の両方から見て良好なモデルと判断される。潜在変数間の相関係数はそれほど大きくはないが、両者は0.1%水準で有意な逆相関の関係にあり、この2因子モデルは、高齢者の現実の地域社会観を簡潔に説明するモデルであるといえる。

3．考察と結論

本稿では、神戸市在住の65歳以上の男女を対象として実施した大規模標本調査の結果に基づいて、日本人口の年齢構造におけるセカンド・マジョリティ・グループとしての高齢者の社会観と、その構造を明らかにすることを試みた。

取り上げた測定項目は、「伝統的保守主義・権威主義」、「アパシー」、「アノミー」、「私的扶養」、「社会的扶養」、「地域生活」、R・マートンが適応様式としてあげた「同調」、「革新」、「儀礼」、「逃避」、「反抗」の5類型の計11分類48項目である。

主成分分析を行った結果、10個の主成分が抽出された。各主成分に所属する項目と当初設定した分類に所属する項目とは異なることになったので、主成分分析の結果を参考にしながら、あらためて共分散構造分析による検証的因子分析を試み、モデルの適合性を検討した。

その結果、以下に述べるような高齢者の社会観モデルが作成された。

なお、括弧内に記されている数値はクロンバックの α で、そのモデルの観測変数の合成得点を潜在変数で示される対象を測定する場合の尺度としたときの信頼性係数である。地域社会観モデルに関しては、肯定的地域社会観と否定的地域社会観を合成することは意味をなさないもので、それぞれについてのみ算出した。ただし、ここに記す信頼性係数は、以上のような使い方をする際に尺度の適切性を判断する基準となるものであって因子モデル自体の良否を判断する基準となるものではない。したがって、ここでは参考値として提示していることを理解されたい。

「逃避」(0.652)と「儀礼」(0.714)、「アパシー」(0.671)の3因子モデル(0.838)、

「アノミー(4項目)」(0.746)と「反抗」(0.677)の2因子モデル(0.803)、

「革新」(0.498)と「アノミー(2項目)」(0.684)の2因子モデル(0.698)、「同調」の1因子モデル(0.655)、「社会的扶養志向」の1因子モデル(0.644)、「老人福祉」(0.496)と「家族意識」(0.370)の2因子モデル(敬老観モデル、0.465)、「伝統的保守主義・権威主義」の1因子モデル(0.786)、「伝統的保守主義・権威主義」と「否定的人間関係観」(0.546)の2因子モデル(0.812)、「伝

統的保守主義・権威主義」と「否定的人間関係観」、「家族意識」(0.370)の3因子モデル(0.833)、「肯定的地域社会観」(0.894)と「否定的地域社会観」(0.572)の2因子モデル(地域社会観モデル)。

個別項目の回答結果から先行研究との関係に触れれば、全体的には、高齢者の多くは決して保守的ではない、というこれまでの多くの研究を裏打ちすることになった。しかし、「伝統的保守主義・権威主義」的社會観を構成する6項目のうち、「昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである」という意見に対しては「全くそう思う」と強く同意する高齢者が22.1%、「そう思う」が50.6%と全体の約70%が同意している。そして、「伝統的保守主義・権威主義」的社會観を構成する6項目すべてにおいて、年齢が高いほど、そうした意見に同意する割合が大きくなっており、多くの項目において、低学歴層あるいは既婚者との同居世帯層に、そうした意見に同意する高齢者が相対的に多くなっている。

政治的、社会的無関心が現代社会の課題として論じられることが多いが、今回の調査結果に基づいていえば、高齢者にはそうした無関心層は少なく、むしろ、その反対に、社会問題に対するに厳しい認識と政治家や専門的知識人、役人に対する不信感をもっている高齢者が多いことが明らかになった。

しかし、他方では、「私たちが少々がんばったところで政治はよくなる」という高齢者は多く、「高望みせずに」、「気ままに生きることが幸せ」と考えている高齢者も多い。

以上、本稿では、セカンド・マジョリティ・グループとしての高齢者の社会観の一端と、その構造を明らかにしえたと考えるが、社会観の個人差については項目ごとの結果を述べた際にごく簡単にしか触れるこ

とができなかった。また、社会観と老後生活観や幸福感、老年観などとの関係についても触れることができなかった。それらについての詳細は、別の機会にあらためて報告することとしたい。

文 献

- Binstock and Day(1996) . Aging and Politics, in R. H. Binstock and Linda K. George eds., *Handbook of Aging and Social Sciences* (4th edition), Academic Press.
- Cutler, N. E.(1977). Demographic, Social-Psychological, and Political Factors in the Politics of Aging: A Foundation for Research in "Political Gerontology", *American Political Science Review*, 71.
- Cutler, S. J.(1987) . Attitudes, in G. Maddox et al.eds., *The Encyclopedia of Aging*, Springer (『エイジング大事典』早稲田大学出版部、1990年)。
- Fengler, A. P. and V. Wood(1972). The Generation Gap: An Analysis of Attitudes on Contemporary Issues, *Gerontologist*, 12.
- Merton, R. K.(1957). *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, The Free Press(森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房、1961年) .
- 中島康之・小田利勝(2001) .「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点 - ジェロトランセンデンス理論の考察 - 」『神戸大学発達科学部研究紀要』8巻2号。
- 小田利勝(1991a) .「高齢者の適応に関する概念的考察」『徳島大学社会科学』4号。
- 小田利勝(1991b) .「老後を自由に生きる」『いのち輝く』8号、徳島県高齢者総合相談センター。
- 小田利勝(1992)「高齢化社会における日本家族の伝統性と革新性 - 高齢者の家族扶養に焦点を当てて - 」日本大学総合科学研究所編『現代日本文化と家族』日本大学総合科学研究所。
- 小田利勝(1993).「サクセスフル・エイジングに関する概念的考察」『徳島大学社会科学』第6号。
- 小田利勝(1998) .「退職に関する新たな視点とサード・エイジの生活課題」『神戸大学発達科学部研究紀要』5巻2号。
- 小田利勝(1999) .「高齢期における自立生活と日常生活活動能力をめぐる」『神戸

大学発達科学部研究紀要』7巻1号。
小田利勝(2000)。「高齢者の老年規範意識の
構造」『神戸大学発達科学部研究紀要』
8巻1号。
小田利勝(2001)。「いま、なぜサードエイジ
か」『人間科学研究』8巻2号、神戸大
学発達科学部人間科学研究センター
Rose, A. M.(1965) . Group Consciousness a-
mong the Aged, in A.M.Rose and W.A.
Peterson eds., *Older People and Their*

Social World, F. A. Davis.
Strole, Leo(1956). Social Integration and
Certain Corollaries, *American Sociological
Review*, December.
Tunstall, Jeremy(1965). *Old and Alone: A
Sociological Study of Old People*, Routedge
& Kegan Paul(光信隆夫訳『老いと孤独 -
老年者の社会学的研究』垣内出版、1978
年) .

Received June 30, 2001

Accepted September 19, 2001